



音樂文庫

88

歌ごよみ

下総皖一著

音樂之友社

音 樂 文 庫

88

歌 ご よ み

下 総 皖 一 著



音 樂 之 友 社

みよご歌

音楽文庫 88

昭和二十九年七月十日 印刷
昭和二十九年七月十五日 発行

定価 一三〇円

著者 下 総 皖 一

東京都千代田区神田鍛冶町二ノ一〇
発行者 目 黒 三 策

東京都千代田区神田神保町三ノ二三
印刷者 塚 田 重

発行所

株式会社 音 楽 之 友 社

東京都千代田区神田鍛冶町二ノ一〇
電話神田(25)八〇五、七五九三
振替東京一九六二五〇

若干本・乱丁本は御取替致します。

目次

歌ごよみ

序……………	(二)	ぺちよれ……………	(二)	虫……………	(三)	ねずみ……………
………	(五)	ちちよい……………	(六)	蛙……………	(七)	蟻……………
毒蛾……………	(一四)	みみず……………	(一六)	雞……………	(一六)	こうもり……………
………	(一七)	兎とり……………	(一八)	鳥のなきごえ……………	(一八)	………
一鳥……………	(二五)	ペ子……………	(二六)	………	(二六)	………

黄色の花

黄色の花……………	(三四)	もののいのち……………	(三七)	竹の根……………	(三九)
柿の木……………	(四〇)	雑草……………	(四三)	俗説禁断の木……………	(四三)
古老のいい伝え……………	(四三)	………	(四三)	………	(四三)

老少不定

けつとやあ……………	(四六)	がら店……………	(四九)	春の感覚……………	(五三)
記憶……………	(五五)	ベビーオルガン……………	(五九)	転任……………	(六三)
自分のテンポ……………	(六六)	風に向って進む……………	(七三)	弁当のおかず……………	(七三)

……………	(七三)	発音……………	(七)	風呂……………	(八〇)	物の味……………
(八四)	食べ物……………	(八八)	ふぐ鍋……………	(九二)	印度洋……………	(九五)
素人療法……………	(九七)	生老病法……………	(一〇三)	飛んで行く靈魂……………		
(一〇五)	数の世界……………	(一〇七)	服装……………	(一一三)	颱風……………	(一二七)
枇杷の種……………	(一二五)	食い過ぎ……………	(一二三)	電隠考……………		(一二五)
短歌……………	(一二二)					

紀行

岡山行……………	(一四六)	蒲郡行……………	(一五二)	静岡から大分への汽車……………
……………	(一五六)	たなばた祭……………	(一六四)	阿波おどり……………
				(一六七)

曲馬団

曲馬団……………	(一七四)	習慣のちがい……………	(一七七)	短い足……………	(一八一)
しつけ……………	(一八五)	帰省だより……………	(一八九)	静かな生活……………	(一九三)
マスクの事……………	(一九六)	顔の類形……………	(二〇〇)	唇と髪……………	(二〇四)
乗物……………	(二〇七)	空想……………	(二二三)	さくら……………	(二二九)

構図

〔劇〕ある構図……………	(二三四)	鳶職の安東さん……………	(二三四)	黒金高磨さん……………
--------------	-------	--------------	-------	-------------

……………(二三九) 百舌鳥……………(二三二) 幻想……………(二四四) 蛙の声……………
 (二四九) 野バラ……………(二五三) 肩の骨……………(二五九)

喫煙室

外国語……………(二六四) 家を建てる……………(二六六) 秋の虫……………(二六七)
 音楽学校のピアノ……………(二六九) 音楽学生の宿……………(二七一) 早期教育……………
 ……………(二七三) 音楽家二世……………(二七五) 音楽の修業……………(二七七)

歌
ご
よ
み

序

花ごよみになぞらってこれは歌ごよみ。四季折々の鳥の声、虫のね、風の音。自然の音をうたとしたのである。思いつくままに春から秋へとんで見たり夏から冬へ移ったり。

ぺちょれ

朝早くとても勢いこんでがなり、立てる鳥がいる。それをきいているとぺちょれ、ぺちょれといっているようである。何の鳥かどんな恰好の鳥か知らなかった。昭和二十年の五月に私の家が焼けてしまつて堀立小屋を自分で建てて住んでいる時分、隣近所の家々はみんなどこかへ散り散りになつて、ほんの、二三軒しか堀立小屋住いの人になくなつて、広々としたためか、その鳥の声が実にはつきりと響きわたるのである。

その当時、防空ごうの中に寝起きしていた薦職のかしらは朝早く弁当包を手提げハッピ、キャハンでさつそうと私の家の小屋の前を通り乍ら「お願いします」と声をかけて出て行つた。夜は大抵酔っぱらつておそく帰つて来る。ごそごそと空俵を敷いた防空ごうの中へもぐり込むと、ぱたんとふたをしめてしまう。東京で三回戦災にあつて、着るものも、寝る道具もみんな焼いてしまったのである。

家族の者はいたのかいなかったのか知らないが、戦災後とはかく一人で防空ごうに住んでいた。親せきのものは前橋にいたりとかいう事であった。

「だんな、あのちよつとこいという鳥を知ってますか」という。「あれはね鳩よりちよつと小さい位の鳥ですよ。いたずらをしますよ。わしがまいた菜っ葉をみんなくつちまやがったですよ。」

——私の小屋の少しはなれたところに焼け残った森がある。大きな邸の樹木である。その森の中で毎朝がなり立てる小鳥。私もいつか見かけた事がある。ちよこちよこととても速く歩きながら、草の生え繁った焼けあとをあさっていた。子供たちが声をそろえて、アーレラコレラ、アーレラコレラとどなり立てるように、なき立てる鳥である。この声をきくと直ぐに堀立小屋を思い出す。

鳶職のかしらは今どこにいますかしら。半焼けになった大きな桜の木を二人して切りたおして、半分はわしにくれというので、あげたら誰かに三百円で売ってしまつて、アルコールを買つて来てのんでしまった。あんまりぼうぼうにひげが生えているので、私が剃つてやった事がある。

コオロギかキリギリスか知らないが、夜になると盛んになき立てる。木の枝にまでとまっているらしい。キ、キリキリキリキリとないているようだ。たくさん虫がいっしょにないている時は、ただ一面に水でも流れるようにしか感じられないが、その一つをきいていると何となく悲しいうたにきこえる。泣いているようにしか思えない。その声にまじって、チ、チ、チ、チという音がきこえる。あれが鉦たたきとでもいうのか、鉦とすればきわめて小さい鉦を叩いているのである。電燈の灯をしたって飛んで来る虫は、時季によってちがうけれど、緑色の小さいよこばい、これは体にたかってちくりとさす、蚊のように血を吸うわけでもあるまいが、形に似あわずにくらしい虫である。

大きな毒々しい蛾。これは何だか自分の身内の人に不幸でもあつて、その魂が飛んで来たのではなからうかと、うす気味がわるい。とんぼが迷い込む事がある。突然にぱちっとコオロギが飛んで来て、翅をぶるぶるふるわせているのはわれわれにはきこえないけれど、極めて高い音を出して鳴いているのかも知れない。スイツチョ。これはとんで来てもなかなか鳴かない。ただじっと灯の光りを楽しんでいる様子。カマキリ。これは手を出すと逃げ仕度をしながらもかまをふりあげてかかって来る。足が四本でかまが二本、顔は二等辺三角形で、口の中から又こまかい手のようなものが何本

も出て、ひらひらとたえず動いている。

日本には虫が多い。たまに飛んで来る緑色の臭亀というのがある。これの臭さときたらたまらない。この虫のにおいと、南京虫のにおいと同じである。独逸の宿で、始めの一年間南京虫に攻められたが、はじめのうちは頭の髪の中から首の方まで、デコボコにはれてしまった事がある。

ねずみ

にくらしいのは鼠である。もう大丈夫だろうと思って、すっかり穴をふさいだのにどこからはいつて来るのか、翌朝すっかり大事なものをやられてしまう。人がいるのに、天井上でどたんばたんあばれたと思うと、しのびやかにチュ、チュといって見たり、土台の下を二米も先の方から掘って来て石の下をぐるぐるはいまわり、ほんの少しのすきまを見つけて、そこから室の中にはいつて来る。こんなやつにトンネル工事をやらしたらすばらしい仕事が出来たろう。セメントと砂を買って来て穴をふさぎ、板をきって板壁の穴を釘づけにする。夜ねる時は鼠に喰われるものはないかとあちこちさがしまわって、何もそこに出ていないようにする。いやな動物は、ねずみ、はえ、蚊、南京虫、家だに。――

ちちょい

梅の花も咲きそうな時分、木の枝にとんで来てチチヨイ、チチヨイと鳴く鳥がいる。背中の方は雀のようでもあるが、腹の方に少し黄色味がある。虫をくわえて来てぐぐぐぐといっていない事もある。巢でもつくっているのか、ひなでもいるのかと思うがそうでもないらしい。ずっと前にローラーかなりやを飼った事がある。雌が卵を抱きはじめると、雄がしきりに餌をはこんでやる。雌が時折便所へ下り立つとその間雄がかわりに卵を抱くといった具合である。何日か経ってひなが出る。そのひなは全くのはだかで、ただ赤い肉のかたまりでうようよしている。目も開いていない。けれども親が餌をやるときには、顔中口だらけにして食べる。親は一旦自分で皮をむいた餌を口の中に入れて、のんでしまったものを出して子供に食べさせる。それからおかしい事は、はじめのうち子供の糞は親がみんな食べてしまう。そして自分のといっしょに大きなのを箱の中におとして行く。目が開いてしまつては親をおぼえてしまうからというので、目が開かないうちに、それでも羽毛は大分生えて来たのを親から離して箱の外に連れ出し、綿の中に入れて飼った事がある。餌を毎日何十辺となくやる。皮をむいた粟を水でといて、小さなへらで口のそばに持って行つてやると、大きな口を

あけてたべる。胸がはりさけるほどたくさんたべる。しかしなかなかしつけはいいもので、糞は決して綿の中へはやらない。手にもって外へお尻を向けてやるとぴよつとやる。だんだん目が見えるようになって、少しもこわがらない。指の先にとまらして、例によってへらの先に餌をつけて目の前にもって行くと両方の羽を少し開きかげんにして体を左右にちょこちょこふりながら、チチヨイ、チチヨイとなく。餌を貰うのを喜ぶ様子である。そしてなかなか食べない。しばらくそうして楽しんでからぱくつとたべる。だんだん大きくなって、もうどこでもとべるようになっては、いつまでも外で飼うわけにも行かないので、又箱の中へもどしてやった。親といっしょにとまり木にとまって盛んになきたてる。コロコロコロコロ……はじめひとつがいたったのが、しまい二十何羽になった。自分の家の人とよその人はちゃんとおぼえていて、知らない人が来ると、箱の中ではさばさとびまわって大変なさわぎになる。そのうちに戦争がはげしくなり、人間の食べる餌がなくなって来たので、とうとう小鳥屋に安く売ってしまった。私が育てたローラーかなりやばもう死んでしまったろうか。

蛙

うちのむすめは今年数え年二十三。妻の姉の長女で、サイパンで生まれた。物心つ

いてからは東京で育ったが、ほたるって見た事がないという。なるほどそういえば東京にはほたるがいない。考えて見ると東京の子供はいろいろな経験に欠けているのではないかと思う。勿論田舎の子供に比べて豊富な経験もあるかも知れないが、自然とか天然現象とかいうものは東京で経験出来ないものが多いようだ。

私は田圃なかの一軒家の百姓部落に生まれて、いろいろな動物や植物を友として育った。蛇が蛙を呑むところをつかまえて蛇をたたき殺して、蛙を救ってやった事もあるが、蛇にして見ればいい迷惑な話であつたろう。稲の葉が相当にのびて風にそよぐ夏の昼下り、妙におしつぶされそうな蛙の声がきこえるので、そっと近よって見ていると、あぜのへりで蛙が足を蛇にくわえられて逃げようとするけれど、もがけばもがく程だんだん体が蛇の口の中にはいつて行く。そしてとうとう体全体を蛇にのみこまれてしまった。蛇の体はぽこんと高くなつたところが出来ている。こいつめ、という気がして、私は棒きれをひろって来て蛇をたたいた。蛇はするすると逃げまわる。逃がすものかと追っかけてとうとう殺してしまった。そして棒で蛇をさかさにしごとく蛙がぴよこんと飛び出した。大分弱ってはいるけれど死んではいない。田圃の中へ飛んで行ってしまった。

蛙は春先からなき出す。なっている蛙を見ると両方の頬ぺたを大きくふくらませた

りちぢめたりしている。あそこに共鳴か何かあるらしい。釣をしていると浮きにじゃれついてしまつが悪いものである。釣棒でたたけば魚が逃げてしまふだろうし、そんな時にはにくらしい動物である。いなごとるため田圃のあぜを伝わって歩くとぽかぽかんと盛んに蛙が逃げて水にとびこむ。蛙をつかまえる事は極めて簡単だ。そつと近よつて右手でぱつとおさえるとそのまま手の中にいる。体全体が冷たい感觸である。胸から腹は白くて息をするために始終ぺこぺこしている。麦わらを切つて蛙の尻にさし入れて吹くとお腹がぷくつとふくれてくる。そのまま放してやると大きなお腹のままでぴよこんぴよこんはねまわる。その麦わらを吸つたらどうなるだろうとやつて見たところ、黒いどろどろのものが口の中にはいつて来たので、ぺっぺつとしばらくつばきをはいた。蛙の口に小さな火花をくわえさせて火をつけてやると、早く口をあけて吐き出してしまえばいいのに、いつまでもくわえたままはねまわつてとうとうぱんと破裂してびっくりするものもあり、死ぬのもある。おたまじゃくしの事を私の子供の時分にはゲーロゴと呼んでいた。ゲーロゴは小さいのは蟻のようだけれど、だんだん大きくなると全長が五センチ位になる。すると尾の近くから足が二本出て続いて前足も出て来る。そうになると尾がなくなつて体全体が急にやせて小さくなる。実に小さい虫のようにピョンピョンはねまわる。蛙は益虫だそうで、あひるを飼っている家

の子供があひるの餌にするために、やすと称する三本針か四本針の鎗を竹の先につけて、小川のこちらがわから向うがわに在る蛙を突いて歩くのを学校の先生が禁じた事があるが、放ち飼いにしてあるあひるにして見れば、それが生きるための餌であるわけだ。皆それぞれ他の生きものを殺さなくては生きられないのである。

雨蛙は可愛い小動物である。背中は木の葉と同じ緑色で、木の葉の上にびよこんとすわっている。雨が降りそうな天気になると、小さいくせにとても大きな声を出してなく。あっちでもこっちでもなく。ひぐらしや河鹿の声はよく文学の材料になるが、雨蛙の声はあまり文学の材料にならないらしい。風情のあるものであるけれど。それにくらべると田圃の蛙の競ってなき出す声はあまり文学的ではないようだ。蛙は夜でも昼でも休みなしに在る。夜眠らないのかも知れない。

ひきがえるは文学者や哲学者やさては忍術使いや、あぶらうりなど実にさまざまな交渉を人間と結んで在る。夕方のそりのそりとえんの下などから現われてじつとして在る目の前に、蚕などを一匹なげてやると虫が動き出すまで見て在る。動いたとなるとぺっと音をさせて虫をのみこんでしまう。その早業はまさに忍術である。前足の片方を出して何かのぞきこんだまま何十分でもその姿勢を保っている悠長さにはこっちが負けてしまう。

私は子供の時分よく桑摘みをさせられた。一貫目摘むと二錢駄賃を貰う約束である。けれど右手の人差指に金具をはめてぱきぱきと桑の葉を摘んではざる、の中に入れて行く仕事は実に退屈な作業であつた。一貫目にするためには長い時間を要する。手際よくぱきぱきと摘む事の出来る大人の人は、一貫目二貫目位簡単に出来て、大きな十貫目もはいるざるにいられて背中に負って行くけれど、私には長い時間がかかるのである。そして、雨蛙だの、かまきりだの尺とり虫、髪切り虫、かぶと虫などと遊ぶ方が面白くなってしまう。

蟻

何という名か知らないが、細長い葉の草。これは恐ろしく強じんな植物で、日照りが一ヵ月も続いて地面がかちかちになっても、平気で枯れようもしない。敷石と敷石の間の狭い所にも生え繁って、鎌で切ろうとすると鎌の刃が石に触れてひんまがつてしまうので、両手で引張って見るけれどもなかなか抜けやしない。そんな強じんな草でもさすがに日中の暑い時刻には少し葉がしおれたように見える。

体長二分位の蟻がぞろぞろと通る。みんな一つずつ白いものをくわえている。自分の体ぐらいの大きさの荷物。あとからあとから非常な速さで移動する。荷物を持って